

# 戦時下の朝鮮文学界と日本

## －「内鮮一体」について－

神谷 忠孝

### はじめに

1910年の日韓併合以来、日本は着々と朝鮮への植民地政策を推進してきた。1932年の満洲建国宣言以後になると、思想界、文芸界への言論統制は日本国内よりも朝鮮が先行するかたちで進められた。1931年、朝鮮で第一次 KAPF（プロレタリア芸術同盟）検挙事件があった翌年、日本ではプロレタリア歌人同盟が解散させられた。1934年、朝鮮で第二次 KAPF 検挙事件があり、日本ではナルプ（日本プロレタリア作家同盟）が解散声明をだした。1937年7月の日中戦争勃発直後、朝鮮では共産主義者、民族主義者5百余人を検挙する恵山検挙事件が起こった。1938年、日本で国家総動員法が施行され、朝鮮では国民精神総動員朝鮮聯盟が結成され、労務徴用令、朝鮮教育令が発令された。

中国戦線への兵站基地としての朝鮮を重要視する必要から朝鮮人を皇民化する政策が緊急課題となり、「内鮮一体」というスローガンが打ち出されたのである。『モダン日本』第十卷第十二号（1939年11月1日発行）は「朝鮮版」（2007年3月、オークラ情報サービス株式会社から復刻版が出た）を組んだのである。そこに御手洗辰雄の「内鮮一体論」が載っている。英国がノルマン人、サクソン人、ケルト族、チュトン族などとの民族戦争を繰り返したあげくにアングロサクソン民族となった例を紹介し、次のように述べている。

〈内鮮一体は、東亜の環境が命ずる自然の制約である。科学文明が発達し、大国家群時代となつた今日以後、少数民族の割拠的存在は不可能となつて来る。内鮮領国は最早分立しては生存を容されない。ただに内鮮両国のみならず、東亜の全民族は一の共同運命体として、合作協力しなければ生存し得ない時代となつた。〉

〈三十年以前と今日とを較べて見れば、そこには真に隔世的な同化と融合が既に進行してゐる。法律制度の上に於ては言ふまでもなく、衣食や風俗習慣、日常生活の些事に至るまで激変を起しつつある。特に半島民衆の精神文化に至つては数世紀に値する程の変化を起してゐる。世界の何処に、又歴史の何処に、朝鮮の民衆が今、日本化しつつある程の急激にして顕著な変化を起した事実があるか。籍すに歴史的時間を以つてせよ。われわれは世界第一の大日本国民となるであらう。〉

中央協和会理事長の関屋貞三郎は「内鮮一体と協和事業」で、日本国内に半島出身者が八十万人居り、〈是等の人々は其の言語、風習其他文化教養の程度等に於て甚しく相違するので、内地に在りて日本在来の社会生活中に融け込むには種々の支障があり、之を放任する時は是等の人々の幸福の為にも〉〈昭和十二年より内地同化の基調の下に半島出身同胞の生活改善、教育教化の普及徹底等各般の事業の実施に着手〉したことを報告している。

こうした内地の「内鮮一体」に呼応して『モダン日本・朝鮮版』と同年同月に京城から『今日の朝鮮問題講座』が刊行された。

## I 緑旗聯盟の『今日の朝鮮問題講座』

1939年11月20日、京城府初音町（現在のソウル）の緑旗聯盟から『今日の朝鮮問題講座』全6巻が発行された。1巻から6巻までのタイトルは順に『内鮮一体論の基本理念』『大陸兵站基地論解説』『学制改革と義務教育の問題・志願兵制度の現状と将来への展望』『朝鮮思想界概観』『現代朝鮮の生活とその改善』『国史と朝鮮』である。手元にある講座の奥付は1940年12月で6版とあるので部数は出たらしい。日本の取次店が3社あり、日本人に読ませるのが目的だったとも考えられる。

「序」は朝鮮総督・南次郎の筆名。〈緑旗聯盟が有心の学究、学徒諸君を中心として京城に組織せられて以来其の真摯なる運動が人心の啓導、社会の教化に資する所少からざる貢献に対しては予て敬意を表して居た所である。（改行）今や聖戦下に於ける我が半島が物心両面に亘りその面目を一新し、東亜の新情勢に対して占むる重要性を高め来れる事実に鑑み、緑旗聯盟が新に「今日の朝鮮問題講座」を発行し、朝鮮の実態を全国に認識せしめんとするの拳は蓋し極めて有意義なりと謂ふべく、深く其の成果に期待するものである。〉とある。

緑旗聯盟は1925年2月11日設立の、国柱会（日蓮宗）会員たちによる京城天業青年団が母体である。それが緑旗同人会（1930年5月設立）を経て、1933年の紀元節に緑旗聯盟として再組織された。会長は京城帝大予科教授津田栄、主幹は弟の津田剛であった。『朝鮮思想界概観』の第九節「民間に於ける新日本建設運動」には、〈緑とは生成発展を象徴する日本主義の神髄を象徴し、それは仏教の仏性、儒教の天に通じ、西洋文化の人本主義の真義を浄化する意味を持つ。「緑の生活運動」とはこの思想を背景として起つた生活運動である。〉という説明がある。1938年7月、「国民精神総動員朝鮮聯盟」が結成されたあとの1939年5月、緑旗聯盟は第7回総会で「内鮮一体の徹底」を決議し『今日の朝鮮問題講座』を企画したのである。

[1]『内鮮一体論の基本理念』の著者は緑旗聯盟主幹の津田剛。要点は次の文章である。

〈内鮮一体の問題は内地の人々に深刻なる反省を求めると共に、又半島に於いては更にそれが

当事者である丈に大なる反省と自覚が必要である。先づ第一に形而上よりこれを見る場合に半島出身者が人生観の根本的変革を実行しなければならない。悉く半島二千三百万大衆が、陛下の眞の赤子としての自覚と実践を持ち得る迄に非常な努力を重ねなければならない。この点に於て内地に於ける島国的日本観の撲滅以上に、更に幾倍もの痛切なる努力が半島の人士に課せられてゐる。その努力をなす事一日遅ければ一日丈半島は暗いのである。多くの知識層殊に沈黙せる知識層に対して痛切な反省を求める点がなければならない。)

この文章の眼目は、日本国内の日本主義者や植民政策に批判的な知識人に対し、天皇の赤子を朝鮮半島にまで拡大することに同意してもらいたいというところにある。この背景には、「志願兵制度実施法令」(昭和13・2・23)、朝鮮語以外は内地と同じ学制とする「朝鮮教育令」(昭和13・3・3)、「国民精神総動員朝鮮聯盟」発足(昭和13・7)などが進行しているという状況判断がある。

[2]『大陸兵站基地論解説』の著者は京城帝国大学教授の鈴木武雄。

「兵站」は、〈本国外に作戦する軍隊が本国に於ける軍需物資と緊密に連絡し、以て作戦の目的を遂行し軍の生存を維持するための万般の施設及びその運用を総称した言葉〉と説明されている。大陸兵站基地の意義は、〈海を越えて、作戦舞台たる大陸の地続きの一角に位置せしめられてゐることを意味する〉とし、朝鮮は大陸における「第二の内地」「内地の分身」だという。〈要するに、大陸作戦軍に対する軍需補給は内地に依頼せずに朝鮮の産業力で以て引受ける、また直接軍需のみでなく、朝鮮は勿論滿洲北支等大陸の民需も朝鮮の産業力で引受ける、朝鮮海峡が仮に遮断されるとしても、大陸は大陸で独立に軍需民需の補給をはかることとし朝鮮を以てその最終基地とする、それ程に朝鮮の産業力を各部門にわたつて充実発展せしめる〉という。

[3]『学制改革と義務教育の問題』の著者は朝鮮総督府学務課長・八木信雄。朝鮮教育の三大綱領として「国体明徴」「内鮮一体」「忍苦鍛錬」が掲げられている。義務教育の普及については、昭和13年5月現在、官公立小学校二千六百七校、私立小学校百校、簡易学校千四百四十五校で、推定学齡児童総数二百九十六万三千三百三十三人に対し学校に通っているのは百十二万八千八百八十九人で、38パーセントの就学率としている。昭和17年までに就学割合を6割強に高めるという目標が示されている。『志願兵制度の現状と将来への展望』の著者は志願兵訓練所教授・陸軍歩兵大佐の海田要。この中で昭和12年の志願兵が六百名に達したことが報告され、昭和13年2月23日勅令第95号「陸軍特別志願兵令公布」が4月3日から実施に至った。昭和13年の志願者総数は二千九百四十六人で四百六名が選考され、昭和14年は一万二千五百四十八人から六百十三人が選考され訓練所入所が許可された。将来の見通しとして徴兵制度の途がひらけるという意見である。

[4]『朝鮮思想界概観』の著者は森田芳夫。この講座の中で、戦時下の朝鮮を知る上で貴重な資料が集められている。特に第2章「今日の朝鮮思想界―支那事変以後―」は、同友会(文士、弁護士、医師、教育家、キリスト教宣教師、有産家などを網羅した民族主義者の組織)関係者が事変勃発と前後して検挙されていたが、全員が時局に目覚めて転向したことが報告されてい

る。キリスト教系学校職員生徒四千余名が市中行進をして朝鮮神宮に参拝し、反対した白人宣教師と絶縁したことも書かれている。旧共産主義者の思想転向者についても詳しく書かれ、昭和14年10月8日に「反コミンテルン決議」がなされたことなどにも触れている。

「民間に於ける新日本建設運動」では、緑旗聯盟、日本語で「内鮮一体」を宣伝する『東洋之光』(昭和14年1月創刊)、京城で社会の第一線に立つ人々の親睦修養団体「木曜会」、日本を宗主としてアジアの団結を推進する「大東一進会」、朝鮮文人協会など、「内鮮一体」に協力する各方面の団体が紹介されている。

[5]『現代朝鮮の生活とその改善』は津田節子を中心に3名の朝鮮婦人が執筆している。内容は日本、朝鮮が双方の長所を取り入れて改善すべき点を写真、図入りで説明したものである。

[6]『国史と朝鮮』は森田芳夫が執筆。日本民族の半島進出の歴史を概観し、日韓併合を正当化する論調が一貫している。

## Ⅱ 「内鮮一体」と文学—金史良の例

金史良の「光の中に」(『文芸首都』1939・10)が第十回芥川賞の最終選考に残り、寒川光太郎の「密猟者」(『創作』1939・7)が受賞となった。同時受賞ではないにもかかわらず『文藝春秋』(1940・3)に両作品が掲載されたのは選考委員の強い推薦があったからである。選評から「光の中に」についての発言を見てみよう。(文藝春秋『芥川賞全集』第二巻より)

瀧井孝作〈金史良の「光の中に」は、朝鮮の人の民族神経と云うものが主題となっている。この主題は、誰もこのようにハッキリとは描いていないようで、今日の時勢に即して大きい主題だと思った。尚、金史良氏の創作は文芸首都の二月号に「土城廓」という作品もあって、これは平壤の大同江辺の貧民小屋の描写でむかし読んだ森鷗外訳の独逸の短編「鴉」を思出しあれと一寸似た風景で「鴉」程スッキリとは行っていないが、「土城廓」は克明で力があると思った。朝鮮からこの腕前のある作家の出たことはうれしかった。〉

久米正雄〈候補第二席作品「光の中に」は、実はもって私の肌合に近く、親しみを感じ且つ又朝鮮人問題を捉えて、其示唆は寧ろ国家的重大性を持つ点で、尤に授賞に値するものと思われ、私は極力、此の二作に、それぞれ違った意味での、推薦をすべきとど思ったが、不幸なるかな、此の沁々とした作品は、「密猟者」の雄勁さに圧倒され、又、成るべくならば其期の優秀作家一人と云う建前から、授賞に洩れて了った。運が悪いと云えば云えるが、是も或いは却っていい、手頃な幸運かも知れない。私は其点で此の作家の、勉強に待つ事多大である。〉

川端康成〈「密猟者」及び「流刑囚の妻」の寒川光太郎氏か、「光の中に」の金史良氏かを選びたかったのは、他の委員諸氏と私も同じであった。特に「密猟者」ということが満

場一致であったのは、寒川氏の名譽を或いは倍加するものであろう。ただ「光の中に」を共に授賞すべきか、候補として別に優遇すべきかが、問題であった。私は「光の中に」を選外とするのは、なにか残念であった。しかしそれも、作家が朝鮮人であるために推薦したいという人情が、非常に強く手伝っていることもあるし、また「密猟者」に比べると、力と面目さの足りぬところもあるので、結局寒川氏一人に賛成した。とはいうものの金史良氏を選外とするに忍びぬ気持は後まで残った。(改行) 金史良氏はいいいことを書いてくれた。民族の感情の大きい問題に触れて、この作家の成長は大いに望ましい。文章もよい。しかし、主題が先立って、人物が註文通りに動き、幾分不満であった。寒川氏は精神を象徴化する詩人の強さに、面白いところがあって、独特の才質が認められる。しかし、その高く張った未熟さのうちに、ふと崩れそうな不安もないではない。この人の将来の道はそう楽ではあるまい。金史良氏の方が素直に行けるであろう。)

これに続くのは当時の『文藝春秋』編集長、佐佐木茂索で、〈金史良氏の「光の中に」も佳作たるを失わない。「密猟者」がなければ之が芥川賞であることに問題はない。今度の文藝春秋誌上に「密猟者」と併載する事にしたから、就て同氏の「価値あるテーマ」を知って欲しい。〉と併載を決めた。この決定には瀧井、久米、川端の発言が強力に後押ししたことがわかる。

佐藤春夫〈金史良君の私小説のうちに民族の悲痛な運命を存分に織り込んだ私小説を一種の社会小説にまでした手柄と稚拙ながらもいい味のある筆致もなかなか捨て難いのを感じた。そうして「密猟者」の当選と「光の中に」の候補推薦とに決定する議は大賛成、何やら非常に愉快で幸福に似たような気持でさえあった。〉

宇野浩二〈金史良の「光の中に」は、半島人の入りくんだ微妙な気持ちの平暗を、さまざまの境遇の半島人を、それを現すのに適当な題材に依って、可なり巧みに書かれてある。そうして、寒川の「密猟者」が切迫した事件をそれにふさわしい文章で書いているように、この「光の中に」は題材に合った平淡でありながら少し捻った文章で現してある。ところが、申し合わせたごとく「密猟者」がそうであるように、「密猟者」ほどではないが終りの方が物足りない。ところが、金史良の近作「土城廓」を読むと、不幸な妻に片思いする放浪性のある老人を書いているところ、題材が、前者は樺太、後者は朝鮮、の違いはあるが、衝動的なところ、などが可なり似ている。この事は、寒川の小説を読んだ時は当たり前だと思ったけれど、金史良の小説を読んだ時は金史良はこういう小説も書けるのか、と幾らか驚いた。そうして、前の回のように、二人に賞をつけることが出来れば、寒川と金を選ぶ方がよいのではないかと思った。が、又菊池が云ったように「光の中に」を先に読んで相当感心した後で、「密猟者」を読むと、「光の中に」がすうっと遠くへ行っただけで、という言葉に私は半分以上同感した。しかし又、滅多に使えない「有望」という言葉を金史良の頭につけてもあまり間違いにはならないであろう。〉

このほかの選考委員は小島政二郎、室生犀星、横光利一であるが、「光の中に」にはコ

メントしていない。右の選評を読むと、瀧井孝作と宇野浩二が金史良の「土城廊」を読んで力量を評価していたことがわかる。そして、〈朝鮮の人の民族神経と云うものが主題〉(瀧井)、〈朝鮮人問題を捉えて、其示唆は寧ろ国家的重大性をもつ〉(久米)、〈作家が朝鮮人であるために推薦したいという人情が、非常に強く手伝っている〉〈民族の感情の大きい問題に触れて、この作家の成長は大いに望ましい〉(川端)、〈何やら非常に愉快で幸福に似たような気持〉(佐藤)、〈「有望」という言葉を金史良の頭につけてもあまり間違いにならない〉(宇野)などの言葉に日本語で小説を書く朝鮮人作家を待望する熱い思いが伝わってくる。

「光の中に」は東京のセツルメントで働く朝鮮人大学生が、山田春雄という、父が日本人で母が朝鮮人の少年と出会い、二つの民族の混血で悩む心情を理解して希望を持たせるように導いていく内容で、「内鮮一体」をテーマとする作品であった。朝鮮人の日本語小説は張赫宙が「餓鬼道」(『改造』1932・4)をはじめとして、プロレタリア文学の分野で発表されていたのだが、朝鮮の農村を舞台としたものであった。金史良の「土城廊」も朝鮮が舞台だが、「光の中に」は日本を舞台にしたことによって注目されたともいえる。

第一小説集『光の中に』(小山書店、1940・12)が出版されると評判になった。板垣直子は『事変下の文学』(第一書房、1941・5)の「植民地文学」の項で、李光珠、李孝石、張赫宙などに触れたあと、金史良について、〈彼には単なる写実以上のものがある。他の人達にない烈しい内面性、近代的な着眼点があるのである。新人の中では、金史良氏が一番目立ち、私にとつても興味のある作家である。〉と書き、「天馬」(『文藝春秋』1939・6)、「草深し」(『文藝』1940・7)にも触れて次のように述べた。

氏には朝鮮民族の諸々の特性、宿命についての強い凝視がある。従つて氏の選ぶ題材もその線に沿ふ暗いものばかりである。作品もいひがたい一種の陰惨な効果をたたへてゐる。「草深し」の中では、朝鮮奥地の、たとへば耕地をえるために火田民の追ひこまれていつた土地に、どんな風な野蛮な、文明の日の目に浴さぬ出来事が起つてゐるか、さういふ社会を浮き上げてゐる。「光の中に」には、朝鮮人の母親を持つてゐることを卑下し、ひねくれてしまつてゐる一人の少年を、青年教師の温い愛情が、すなほな心持に取戻す事情が展開してゐる。少年の父母のすさんだ労働者の生活を背景にとりいれることによつて、朝鮮人の生活を一瞥させ、この作品には、暗い密雲が重く流れてゐる如くである。「天馬」には、一人の若き鮮人の文学青年を登場させて、自嘲的に彼を客観化し、同時に京城を中心とする半島芸術界の植民地風な空気を覗かせてゐる。

一九四〇年の末に氏は単行本「光の中に」をだした。この中には氏の処女作も入り、他に「無窮一家」も入つてゐる。これは作者によると、「内地における朝鮮移民の苦難の生活を、朝鮮内の同胞に伝へよう」との意図を託されてゐる。

作物を通して見る限り、金史良氏は半島の生んだいはゆるインテリ作家の徴候を十分つけてゐる。そのインテリ性から、氏の文学の新しさと特異性と個性が生れてゐる。何れも作品の内

部が少しごたついた感じがあるが、一ぱい詰め込む流儀の表現法が、また同時に、新興半島文学らしいともいへるのである。

板垣直子は当時の文壇ジャーナリズムの中で率直に発言する評論家として認められていたので、この文章は日本文学に植民地文学を位置づけたものである。芥川賞選考委員の意向が効を奏したわけである。聳肩目でなく、正当に評価されたという意味を持ったのである。

### Ⅲ 「内鮮文学」という視点

「光の中に」が選考委員の特別なはからいによって活字になって『文藝春秋』に発表されたことで、朝鮮人作家が誕生した背景には「内鮮一体」に呼应する時代背景があったことがわかった。作品の完成度は「密猟者」に及ばないというのが選考委員の一致した意見であったのに掲載されたことに、金史良自身はどう考えたのだろうか。芥川賞候補作に選定されたことを母に知らせる書簡「母への手紙」(『文藝首都』1940・4)に次の文章がある。

愛する母上様 私は考へたのです。本当に私は佐藤春夫氏の云はれるやうなことを書いたのであろうかと。何だか自分は一介の小説書きではなく、何か大きな、でつかいものひしめきの中からスプリングをかけられて飛び出させられたやうな胸苦しさを感じたのです。少なくともその瞬間そんな思ひ過しをしたのです。私はもともと自分の作品でありながら、「光の中に」にはどうしてもすつきり出来ないものがありました。嘘だ、まだまだ自分は嘘を云つてゐるんだと、書いてゐる時でさへ私は自分に云つたのです。後になりその事についていろいろと先輩や友人達から指摘されるのです。私は黙つてゐるしかありませんでした。

佐藤春夫が「民族の悲痛な運命を存分に織り込んだ私小説」と評したことを疑い、「何か大きな、でつかいものひしめきの中からスプリングをかけられて飛び出させられたやうな胸くるしさを感じた」と書いているところに、選考委員の背景にある「何か大きな、でつかいものひしめき」、すなわち時勢を感じ取っているのである。「まだ自分は嘘を云つてゐる」とは、日朝混血の少年の苦悩に同調するような小説を書いたことへの自省であろう。実力を認められたからではなく、ためにする賞揚であったことを見抜いていたのである。

この点について鋭く言及した論考が最近出版された。1962年、韓国に生まれ、東京大学大学院総合文化研究科比較文化コース博士課程を終了し、桜美林大学国際学部准教授・鄭百秀氏の『コロニアリズムの超克－韓国近代文化における脱植民地化への道程－』(草風館、2007・10)である。この本は、植民地「国語」作家の中心となった金史良の「草深し」、「光

の中に]、「天馬」を詳細に分析して「内鮮一体」の欺瞞性をあきらかにしようとしている。とくに「国語」政策に対して日本語小説を発表した朝鮮人作家の作品を「内鮮文学」と名づけているところに新見がある。「光の中に」については、芥川賞の選評に注目しながら作品の読解を試みている。

候補作品になったことについては、「光の中に」は、作品の内容や水準の面からではなく、まず、朝鮮人作家による「国語」作品であったがために、「内地文壇」の関心を引き起こしたという事情がうかがえる。いいかえれば、朝鮮人作家の「国語」創作を指導する「内地文壇」の「内鮮文学の建設」への意思が、「光の中に」の理解に先入観として深く介入していた」と述べている。また、選評を分析して、「芥川賞審査委員たち、あるいは「内地文壇」からの「光の中に」にたいする評価がどれほど皮相的だったかが明らかである。それらの言説は、「光の中に」に対する解釈というより、むしろこの作品が観察対象として取り上げている「内鮮一体」のイデオロギーの内部の認識にすぎないのである。」と書いている。

このように、日本側のたくらみをあばきながらも、最終的には「光の中に」を評価するのである。それは、山田春雄という少年を混血児に設定したことで、単一民族にこだわる日本人の迷妄を批判し、「内鮮一体」という帝国主義イデオロギーを痛切に批判しているという視点。「南」という字を「なん」と読むか、「みなみ」と読むかを問題にすることで、「創氏改名」の問題を裏返しにしているという視点である。結論として、「光の中に」は、「脱植民地主義の地平への可能性が見出される」と述べている。

#### IV 戦前に日本に留学した朝鮮人文学者

明治末期から昭和の戦前にかけて多くの朝鮮人が日本にやってくる文学を学んでいる。来日の動機はさまざまだが、近代小説の新しい方法を習得し、朝鮮の文学を世界に発信したいという点に共通性があったようである。日本に留学しなくても日本語小説・評論を書いた人もいる。京城帝大に日本から優れた学者が教えに行ったこともあり、総じて京城帝大出身者は文学の分野では留学した人は少ない。『国民文学』主宰の崔載瑞（創氏名・石田耕造）はその典型である。

以下、先行文献を参考に日本に来た朝鮮人文学者について、生年順に一覧表を作成してみた。没年がないのは北朝鮮に拉致された人、自分から越境して行方不明の人である。

参考文献：『韓国名作短編集』（韓国書籍センター、1970・10）、『現代韓国文学選集』全5巻（冬樹社、1973・4）、古山高麗雄編『韓国現代文学13人集』（新潮社、1981・11）、大村・長・三枝編訳『朝鮮短編小説選』上・下（岩波文庫、1984・4）、川村湊著『〈酔いどれ船〉の青春』（インパクト出版会、2000・8）、『日本植民地文学精選集・朝鮮編』（ゆまに書房、2000・9、第二輯、2001・9）、『朝鮮を知る事典』（平凡社、2001・11 新訂増補版）



- (1) 李光洙 1882-1950 平安北道定州生。1905年、当時の民族団体・一進会派遣の留学生として渡日、東京の明治学院に学ぶ。帰国後、教師をしながら著作活動を始める。再度渡日して早稲田大学で哲学を学びながら長編小説「無情」を『毎日申報』に連載し、朝鮮最初の近代小説と高い評価を受けた。
- (2) 趙明熙 1892-1942 忠清北道鎮川郡生。1914年、ソウル中央中学校中退、1919年、東洋大学東洋哲学科に学ぶ。1923年に帰国して記者生活。1925年の朝鮮プロレタリア芸術同盟の創建に参加。28年ソ連に入り教員生活を送る。36年ハバロスクにおいてソ連作家同盟極東地区常任委員をつとめ、ソ連で没。作品に「洛東江」。
- (3) 李箕永 1895-1984 忠清南道牙山郡生。中等教育を受けた後、1922年、東京に渡り正則英語学校夜間部に入学。翌年の関東大震災で帰国。朝鮮プロレタリア芸術同盟（カップ）に中心的に参加する一方『朝鮮之光』記者となる。34年、第2次カップ事件で2年間の投獄生活。解放後は朝鮮民主主義共和国で最高人民会議副議長、朝鮮文学芸術総同盟中央委員会委員長として活躍。作品に「故郷」「大地」がある。
- (4) 廉想渉 1897-1963 ソウル生。慶応大学に学ぶ。36年、『朝鮮日報』の主筆兼編集局長。作品に「万才前」「三代」「自殺未遂」がある。
- (5) 鄭然圭 1899-1979 慶尚南道安義生。京城専修学校卒。18歳頃から小説を書き始める。22年渡日し、翌年、日本語小説『さすらいの空』（宣伝社）でデビュー。はじめはプロレタリア文学に参加したが32年以後は皇道主義に近づく。日本人と結婚し戦後は岩手に住む。1960年帰国。鄭大均（首都大学東京教授）は息子である。
- (6) 金東仁 1900-1951 平壤生。小学校卒業後東京に渡り、東京学院、明治学院中等部を経て1918年、川端岡学校に入学。この頃から文学修行をはじめ、1919年、朱耀翰、田栄沢らと朝鮮初の文芸同人誌『創造』を東京で発刊。作品に「甘藷」がある。
- (7) 韓雪野 1900- 日本大学に学ぶ。カップ創設に参加。作品に「黄昏」
- (8) 玄鎮健 1900-1943 大邱で訳官の家系に生まれる。ソウルで勉学した後、上海・東京を往復。1917年、成城中学3年に編入するが翌年帰国。1921年、朝鮮日報社入社。時代日報社を経て1925年、東亜日報社入社。36年、日章旗抹殺事件に関連して検挙投獄さる。生活難の中、歴史小説を執筆。結核で死亡。作品に「無影塔」
- (9) 金東煥 1902- 東洋大学に学ぶ。雑誌『三千里』主宰。詩集「国境の晩」拉北。
- (10) 羅稲香 1902-1926 ソウル生。1918年、京城医学専門学校に入学するが翌年

- 東京に渡り早稲田大学に入学しようとして失敗、帰国。以後、『啓明』編集部員、安東普通学校教員、時代日報学芸部記者などを転々。1925年、再度、東京留学を試みるが失敗、肺結核が悪化しソウルで死亡。作品に「水車小屋」「桑の葉」
- (11) 朴花城 1904-1988 木浦の裕福な家に5人兄妹の末娘として生まれた。1916年、貞明女学校卒業、同年、上京し淑明女学校本科2年に編入。1926年、日本女子大英文科に入学するが、29年、家庭の事情により中退して帰国。1932年、長編「白花」を『東亜日報』に連載。他の作品に「下水道工事」「早鬼」がある。
- (12) 蔡萬植 1904-1953 全羅北道生。早稲田大学中退。初期の同伴者的作風から風刺性の強い社会小説へと転じた。作品に長編『濁流』（講談社、三枝壽勝訳）がある。
- (13) 李泰俊 1904- 江原道生。上智大学に学ぶ。雑誌『文章』編集。九人会の一人として、不遇な人物を主人公に書いた。作品に「狩り」
- (14) 張赫宙 1905-1997 大邱生。高等普通学校を卒業して1927年から5年間教鞭をとる。1932年4月、『改造』の懸賞小説に「餓鬼道」が当選。日本語小説が文壇的に認められた最初である。36年渡日し、野口桂子と結婚。1952年に帰化。
- (15) 咸大勲 1907-1949 黄海道生。日大、東京外語に学びロシア文学の翻訳を行う。
- (16) 金素雲 1907-1981 慶尚南道生。1920年に渡日。北原白秋に師事。
- (17) 李石薫 1907- 平安北道生。平壤高等普通学校を経て早稲田高等学院を卒業。平壤放送局、朝鮮日報社に勤務。牧洋の創氏名で日本語作品「静かな嵐」がある。
- (18) 李無影 1908-1960 忠清北道生。1925年に渡日し、加藤武雄宅で3年過す。無政府主義的作品から農民文学へと進んだ。日本語作品「青瓦の家」がある。
- (19) 金起林 1908- 日大芸術科、東北大英文科に学ぶ。朝鮮日報の記者をしながらモダニズム詩を実作。朝鮮戦争時に拉北、行方不明。
- (20) 青木洪（本名・洪鐘羽） 1908 - 黄海道生。間島の日本領事館ボーイをしながら日本語を習得し、細田民樹と文通。渡日して九州、大阪、東京で左官をしながら文学を学ぶ。1941年、『耕す人々の群』（第一書房）を青木洪の筆名で発表。翌年帰国。1944年、半島文学者総決起大会に地方代表として参加した。
- (21) 林和 1908-1953 嘉会洞生。本名・林仁植。普成高等普通学校中退。1929年東京に留学。1932年、カップ書記長等を歴任。解放後、朝ソ文化協会中央委員会副委員長に就任。1953年8月6日、米帝スパイの嫌疑で死刑。清張「北の詩人」モデル。
- (22) 白鉄 1908-1985 平安北道生。東京高師に学ぶ。帰国後カップ中央委員。解放後、韓国ペンクラブ会長。
- (23) 朴泰遠 1909- ソウル生。法政大学中退。九人の会結成に参加。「五月の薫風」
- (24) 金龍濟 1909-1994 忠清北道生。日本の中央大学中退。1938年帰国。朝鮮文人協会幹部として「国民文学運動」を推進した。

- (25) 金文輯 1909- 慶尚北道生。早稲田中学、松山高校を経て東京帝大中退。小林秀雄、横光利一の影響を受け、親日派として活躍。解放前に渡日し日本に帰化。日本語小説『アリラン峠』がある。
- (26) 許俊 1910- 平安北道生。法政大学に学び、帰国後、朝鮮日報記者。満洲に渡り解放を迎えたいらしい。北に留まったが消息不明。作品に「習作室」がある。
- (27) 李箱 1910-1937 ソウル生。朝鮮総督府に勤務しながら雑誌『朝鮮と建築』に「異常の可逆反応」を日本語詩として発表。1936年渡日し、翌年2月、思想犯の嫌疑を受け拘禁される。1カ月ほどで釈放されるが病状悪化して4月に27歳で死去。
- (28) 金南天 1911- 平安南道生。法政大学中退。カップの東京支部発行の『第三戦線』に参加。1931年、カップの方向転換期に林和と帰国しボルシェビキ化を主張。解放後は朝鮮文学者同盟の創立に参加。北へ行ったあと、一時朝鮮文学芸術同盟書記長をつとめる。作品に『姉弟』『踊る夫』『少年行』などがある。
- (29) 鄭飛石 1911- 平安北道生。日本大学中退。日帝末期に『国民文学』に日本語小説を発表。『小説・孫子兵法』の邦訳がある。
- (30) 安壽吉 1911- 早稲田大学高等師範部英語科中退。作品に「第三人間型」。
- (31) 崔貞熙 1912- ソウル中央保育学校卒。東京幼稚園保母。作品に「清寂一瞬」。
- (32) 池河連 1912-1960 小学校を終えて渡日、東京の昭和高女と東京女子経済専門学校に通ったという。1934年ころ林和と結婚。作品に「訣別。北朝鮮に渡った」。
- (33) 金史良 1914-1950 平壤生。1932年渡日、佐賀高校、東京帝大に学ぶ。「光の中に」が芥川賞候補となって注目された。1943年帰国し、『国民文学』に長編「太白山脈」を連載。1945年春、在支朝鮮出身学徒兵慰問に徴用作家として派遣された機会を利用して華北朝鮮独立同盟に脱出。1946年以後は朝鮮民主主義共和国で北朝鮮文学芸術総同盟副委員長となり、金日成大学でドイツ文学を講じたという。朝鮮戦争では従軍作家となるが、1950年10月、仁川付近で病氣落伍し行方不明となった。
- (34) 金鐘漢 1916-1945 日本大学に学ぶ。1937年、『朝鮮日報』に詩「古い井戸のある風景」が当選し詩壇に登場。『文章』誌に表現主義的な作品を発表。
- (35) 伊東柱 1917-1945 北間島生。1941年の渡日し同志社大学に入学。思想犯として逮捕され福岡刑務所に収容され獄中死。詩集『空と風と星と詩』（影書房）がある。
- (36) 柳周紘 1921-1982 京畿道生。19歳で渡日し早稲田大学に学ぶ。「朝鮮総督府」
- (37) 李柄注 1921- 慶尚南道生。明治大学文芸科卒、早稲田大仏文化中退。「冬の夜」
- (38) 張龍鶴 1921- 早稲田大商科中退。作品に「ヨハネ詩集」がある。